

## 遊星會合の記録

### 【記録に残る天の變異】

以下は去る三月23日の東日天文俱樂部例會席上において、早乙女清房博士が「遊星パジェント」と題して話された講演の要旨です。

遊星が接近することを“星合”と言ふ。

記録に残つてゐる天の變異を見ると、祖先が如何に此等を畏怖したか想像に餘りある。今より400年前コペルニクが地動説を主張したが、それより100年を経た頃(今より300年前)イタリアのガリレオが望遠鏡を造り、水星や金星を觀測した所が、是等が三ヶ月の形に見え、この確固たる事實に益々地動説は確立し、これが日本へはいり、學者間に行き渡り、在來の觀念を一新した。この努力が近代天文學を作りあげた礎石ともいふべきものである。迷信のお蔭で約900年の長い間遊星の觀測を熱心によつたが、今から考へると幸である。一利一害はあるが、天の異變が計算され、日本でも「日本天文史料綜覽」中に編纂されてゐるが、斯の如く古人が如何に觀測に腐心したかゞ偲ばれる。

先づ太陽より餘り離れずに運動してゐる水星と金星に就いて述べると、水星は太陽から遠くて28度、金星は48度位で、是等を内遊星と言ふ。

### 二つの遊星が接近した記録

**水星と金星** 約759年前、養和元年(1181年)八月3日“辰星太白相犯す”と玉葉中尙通に記録あり。

又、約427年前の永正10年(1513年)五月19日“太白、辰星、合”と後法成寺公記に残され、4人の記録が残つてゐる。

**水星と木星** 約760年前の安元2年(1180年)十一月10日“歲星、辰星、宿を同じくす”と玉葉に記録あり。

約717年前の貞應2年(1223年)十一月1日“歲星、辰星を犯す”と東鑑に記録あり。

**水星と土星** 約695年前の寛元3年(1245年)九月25日“辰星鎮星を犯す”と東鑑に記録あり。

**金星と火星** 約827年前の長和5年(1113年)十二月15日記録あり。

又、約456年前の文明13年(1484年)二月25日“太白、熒惑を犯す”と實隆公記に記録。

**金星と木星** 約1218年前の養老6年(722年)七月28日“太白、歲星を犯す”と、續日本紀、日本記略に記録あり(21回)。

**金星と土星** 約1213年前の神龜3年(727年)十二月12日“太白、鎮星を犯す”と續日本紀に記録(10回)。

又、文明11年(1479年)閏九月15日記録、“是歲三星東西に出で一に合す”と

假名年代記，和漢合運圖，分類本朝年代記に記録。

**火星と木星** 1248年前，持続6年(692年)七月28日“熒惑，歳星と近づく”と日本書紀，日本記略に記録(17回記録)。

又，約714年前の嘉祿2年(1226年)十一月4日“熒惑，歳星を犯す”と東鑑に記録(8回記録)。

### 三つの遊星が接近した記録

**水星と金星と火星** 約756年前の壽永3年(1184年)六月10日“太白，辰星，熒惑，相互に犯す”と玉葉に記録あり。當時の人々之を見て驚異したのは勿論なり。

**水星と金星と木星** 約511年前，正長4年(1429年)六月21日記録あり。

**水星と金星と土星** 約496年前の文安元年(1444年)四月27日“太白，鎮星，辰星合”とあり(師郷記，時房記，康富記，續本朝通鑑，倭史後編，續史愚抄，野史に記録あり)。

**火星と金星と土星** 寶徳元年(1449年)十月“熒惑，太白，鎮星，合”と記録あり。

**水星と火星と土星** } 兩方共に記録なし。  
**水星と火星と木星** }

**水星と木星と土星** 仁安元年(約774年前，即ち1166年)十一月25日“辰星，歳星，鎮星，相犯す”泰親朝臣記。

**金星と木星と土星** 嘉祿2年(1226年)正月25日“太白，歳星，鎮星合”と明月記，東鑑に記録あり。

### 五つの遊星が集った記録

長い間に數個の遊星が同方向に集合するのは珍しい。水星と金星と火星と木星と土星が會合したのは，約550年前の元中7年(1390年)三月，六星合と，和漢合符續史愚抄に記録あり。此の時は月も同時らしく記録に残つてゐる。かかる現象はまことに珍しく，約138240年に1回らしく，従つて138240年前にあつた譯で，元中7年からさかのぼつて考へると，果して當時人類が生存してゐたかどうか疑問である。よつて138240年より550年を差引いた137690ケ年待つてをれば，こんな状態がまた起る譯である。今度のやうに餘り良く密に集合せず，順よく勢揃ひしたのも珍しいと言つても差支へはないと思ふ。今年(紀元2600年)で，この珍しい現象は天文家の記録すべきことと思ふ。支那に於ては非常に神秘に考へて，太陽，月が冬至點に會合する時，土星も會合し，天地が開關したと傳へられる。

×            ×            ×            ×            ×

次に，米國のヘイル Wm. J. Hail 氏が，P. A. 誌(本年六月號)に記してゐる Planetary Groupings といふ記事によると：

支那の“長沙縣記”の中には，學歷 -143年から1223年まで，前後1366ケ年

間の記事があるが、其の中に、宋の孝宗皇帝の淳熙13年(1186年)の閏七月、五星(即ち火水木金土の五遊星)が軫宿に集まつたといふ記事があり、又、同年八月には**日月五星**が軫宿に集まつたといふ記事がある。此の當時、諸天體の赤經は

日と月： $12^{\text{h}}$ 、水星： $12^{\text{h}}20^{\text{m}}$ 、木星： $12^{\text{h}}20^{\text{m}}$ 、金星： $12^{\text{h}}40^{\text{m}}$ 、土星： $12^{\text{h}}50^{\text{m}}$ 、

火星： $13^{\text{h}}10^{\text{m}}$

で、皆、東西  $13^{\circ}$  以内の距離にあつた。

同様なことが、1524年十一月11日にもあつた。

又、降つて、清朝の咸豊帝の年八年1日(1861年九月5日)に、曾國藩が陣中から一友人に書き送つた手紙があつて、之れによると、此の日の卯の刻に安慶が陥落したことを報じ、其の時、恰も**日月五星**が同時に出現したと書いてゐる。

即ち、計算して見ると、此の時、各天體の赤經は

木星： $10^{\text{h}}30^{\text{m}}$ 、日と月と水星と火星： $11^{\text{h}}0^{\text{m}}$ 、土星： $11^{\text{h}}10^{\text{m}}$ 、金星： $13^{\text{h}}00^{\text{m}}$

故に、皆、東西  $22^{\circ}30'$  以内である。

又、Desvignoles 及び Kirch 兩氏が獨國ベルリンのアカデミ (Denkscher. 3の166, 及5の193) に報告した所によると、支那では、學曆-2445年二月18日に、魚座あたりに於いて、**火星と木星と水星**が室宿に集まつた記録があり、

最後に、清の康熙帝時代の基督宣教師 Joseph Anne Marie de Moyriac de Mailla 女史が著した“Histoire Generale de la Chine ou Annales de cet Empire” (佛國パリにて、1777年出版、第1巻第155頁) に、學曆-2440年二月9日に**五星**が魚座に集まつたことが記録されてある。尙ほ、此の事は、Bailly が Histoire de l'Astronomie Ancienne, depuis son Origine jusqu'a l'Etablissement de l'Ecole d'Alexandrie” (1775年、パリ出版第345頁) にも記してある。

吉井氏の流星寫眞第29號 (第405頁参照)

